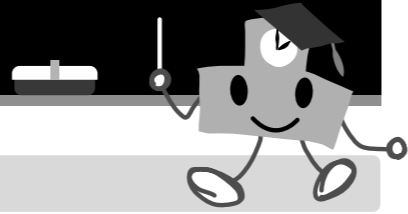


小学校の事例 南区 石山南小学校

農地を利用して稀少品種トマトを栽培。管理の苦勞を体験し、農業や環境へまなざしを向ける。

地域の方から借用した農地で本格的な栽培体験。地域の協力を得て稀少品種の栽培にチャレンジすることで環境への関心に結び付ける。



内容 稀少品種トマトを栽培 地産地消の視点へ

本校では、地域の方から借用している農園での野菜栽培に全校で取組んでいる。

活動は生活科や総合的な学習の時間を利用し、1～2年生はミニトマト、3年生はジャガイモとタマネギ、4年生はエダマメ、5年生は自分が栽培したいもの(キュウリ、トウモロコシ、オクラ、スイカ、セロリ、カボチャなど)を栽培。6年生は、別名「まぼろしのトマト」と呼ばれている「マーグローブ」を栽培している。

マーグローブは北海道で戦後に栽培されていた大玉トマトだが、現在では種もほとんど流通していない。今は唯一、茨城県にある*遺伝子銀行に保管されている。そのマーグローブの種が、札幌市内の種を販売する店で再発見されたことにより、栽培が可能となった。このような稀少種の栽培は、生物多様性や地産地消など、環境と食料の問題について考えていくきっかけともなる貴重な体験だと考えている。

マーグローブ栽培は、長沼町のトマト栽培農家からの申し出で実現し、月1回程度、栽培指導に来校いただいている。栽培指導には、地域の農家や八百屋からの協力もあり、この活動によって地域と学校のつながりが深まっている。また、種の再発見者の名前、トマト農家の名前、アメリカの学者レイチェルカーソン(環境問題を告発した生物学者)の著書名にちなみ、本校では、栽培しているトマトに「ワタライタニセンスオブワンダー」と親しみを込め、名前を付けている。



農園での作業



トマトの収穫

*遺伝子銀行とは植物の種子、微生物、動物の受精卵や精子などを収集、保管する施設。研究者に提供したり、遺伝子組換えや品種改良を行い、農林水産業に役立てるのが目的。

効果 苦勞して育てることで 食物に愛着をもつ

農園での栽培活動により、子どもの食物に対する意識や関心が高まっている。毎日のように畑の世話をし、実際に調理して食べることで、食べ物ができるまでの一連の流れを理解できるようになった。また、生産者の苦勞を実感することもでき、食物に愛着をもつようになっている。「身近な環境を見直しながら大きな視野で環境を考え、無理なく行動する子どもに」という本校のねらいにも近づいている。



学校周辺の清掃活動(落ち葉は腐葉土にして活用する予定です)

今後 本格的な作物栽培から 農業や環境を考える

学校内の教材園と借用している農園とは、活動の目的が異なる。教材園では栽培した野菜が枯れる失敗があっても勉強となるが、借用している農園では、手をかけて栽培し、きちんと育て上げるところまで達成しなければならない。地主農家や近隣農家から「きちんと管理できないのであれば、貸すのは難しい」という声があるためだ。しかし、広い農地での本格的な栽培は、農業や環境について考える貴重な体験であることから、管理指導を徹底し、今後も意欲的に取組んでいきたいと考えている。



ニホンザリガニの調査

継続的な取組とするためには、教員、児童ともにオーバーワークにならない、また児童が達成感を得られる形で活動していくことが重要となっている。

広げよう
つなげよう
環境学習の輪

実施校から
メッセージ

農園での活動の他にも、生物多様性の学習のために、地域の中で教材化できるものを活用しています。3年生は、学校近くを流れる川沿いの「ハーブの小路」で、ゲストティーチャーを招いて草花について教わりました。畑のスロープが約100メートルあり、冬はこの斜面を利用してスキー学習をしています。ニホンザリガニがたくさん住んでいる近くの裏山の環境は、水だけでなく広葉樹の林が重要です。アカゲラをはじめとした数多くの野鳥の宝庫でもあります。また、本校のグラウンドには、大気汚染観測施設があります。南区の環境の状況は、そのまま石山南の校区の状況を意味していることも、子供たちは学んでいます。これからも地域の環境に親しみ、その環境を生かしてできることをやっていきたいと思っています。